

ウマにおけるデジタル環境エンリッチメントの有効性の検討—親しいウマの映像は個別飼育下のウマの常同行動を減らすか—

宮川睦未

瀧本彩加

環境エンリッチメントとは、適切な刺激を与えることで、飼育下動物のケアの質を高める具体的な工夫のことである (Shepherdson, 1998)。環境エンリッチメントは、動物に飼育環境に対する制御性を与える、種特有の行動レパートリーを引き出すなどの重要な役割を果たしている。しかし、刺激に対する慣れや、実施における制約、社会的刺激を与えることが困難であることなどの問題点も挙げられる。これを解決するのが、デジタル技術を導入した環境エンリッチメントである。特に、社会的刺激を与えることができるという点において、本来社会性が高いが単独で飼育されている動物に対して有効であると考えられている。ウマも本来群れで生息する社会性の高い動物であるが、個別飼育されることが多く、常同行動の発現が多くみられる。ウマはほかのウマの映像を見てその内容を認識し、自らの行動を変化させることはわかっているが (Trösch et al., 2020)、親しいウマの映像呈示によって常同行動が減少するかどうかについては検討されていない。そこで本研究では、個別飼育下のウマにとって親しいウマの映像が魅力的でありデジタル環境エンリッチメントとして有効であるか調べるために、双方向のインタラクションが可能な親しいウマの映像、インタラクションが不可能な親しいウマの映像、空の馬房の画像の3つの刺激を呈示し、それぞれの条件についてスクリーンへの接近回数および接近持続時間、映像呈示中の常同行動の回数について記録した。参加個体別に、条件ごとの1試行あたりのスクリーンへの接近回数、接近持続時間、常同行動の回数についてフリードマン検定を用いて分析を行ったところ、いずれについても条件の主効果は有意ではなかった。したがって本研究では、親しいウマの映像の呈示がデジタル環境エンリッチメントとして有効であるという結果は得られなかった。しかし、呈示時間の設定や、実験時の飼育環境、パートナー設定方法など、具体的な改善策を明らかにできた。今後は、本研究で判明した改善策を反映したうえで、馬術部や乗馬クラブにおいて個別飼育されているウマを対象に、ウマの映像呈示によるデジタル環境エンリッチメントの実用化に向けて長期的な効果、パートナー個体の対象拡大、実験装置の最適化などについて検討していきたい。